

# 大学受験期の生徒に対する 英文読解授業の指導法について

～和訳先渡し授業の試み～

## On conducting English comprehension classes to those students who are to take college entrance examinations

李 仁成

Insung Lee

### Abstract

With their students battling against the lengthy English passages that they have to interpret and solve in order to enter college, high school English teachers feel uncertain about the validity of their teaching methods in coping with the enormous volume of English passages given in entrance exams. The time-consuming and ineffective nature of interpreting the English structures backward, employed in the conventional style of grammar translation, is obvious to anyone's eyes. And yet, no responsible or trustworthy teacher would resort to the casualness of just letting students tackle lengthy and puzzling passages on their own, ending the class merely by supplying them with answer keys.

This paper tries to prove the appropriateness of providing and manifesting the Japanese translations at the very beginning of the English interpretation class. The extra time earned by skipping the laborious yet futile attempt of figuring out "correct" Japanese translation is allotted mainly to such activities as reading aloud the passages and summarizing the texts. The fruit of this method will be appreciated not only in the improvement of the students' reading ability but in their listening ability. The legitimacy of providing the Japanese translation and engaging students with sufficient oral activities will be further supported by the results of both the tests and the questionnaires given to students.

**Key Words** : *Wayaku-sakiwatashi* (providing the Japanese translations first), reading aloud, comprehensible input, intake, output

### 1. はじめに

センター試験第6問などのような大学入試英語長文問題に対応するため、受験期の生徒達を授業でどのように指導していったらよいのであろう。普段の授業で行われている文法訳読法を基盤とした指導法は受験を目前に控えた生徒達にとって有効なのだろうか。批判されて長年になる文法訳読法は文構造を解読するために後戻り式の解釈を余儀なくされて非効率的であり、

数ヶ月後の入試において大量の英文解釈が求められる受験生には勧められない。かといって、授業中のほとんどの時間を生徒達に長文読解問題を解かせ、授業の終了間際に答合わせと若干の解説をするだけでは授業としては成り立たない。筆者は、和訳先渡しと音読訓練を柱とした授業展開が、入試を控えた生徒達の英文読解能力をより効果的に伸ばし、実際の入試の場面においてもより実戦的で効率的な英文読解の技法を与えることが出来ると判断し、その是非を検証した。また、長文問題を前にするだけで意欲を削がれてしまうような生徒達が、和訳先渡しの授業を経てどのように変化していくかを観察・考察した。

## 2. 研究目的

和訳先渡しと音読訓練を主体とした指導法が受験を間近に控えた生徒達に対する長文問題読解指導法として適切かどうかを検証し、同時に、生徒達の長文読解問題に対する学習意欲の変化を考察する。

## 3. 研究方法

- (1) 先行研究による和訳先渡し授業、および音読と読解の関係についての研究
- (2) 和訳先渡しと音声訓練を主体とした授業が、生徒達の学習意欲に及ぼす影響についての研究
- (3) 上記の指導法を受けた生徒集団と、従来の文法訳読法を中心とした指導法を受けた生徒集団との英文読解能力の差異に関する研究

## 4. 和訳先渡し授業について

文法訳読法を主体とした日常の授業の中で、我々教師は次のような問題を抱えている。

1) 英語の授業にも関わらず授業中聞こえてくる言語は教師による日本語の解説と生徒による和訳がほとんどである。2) 和訳を中心とした授業が、生徒達の英文読解能力育成に寄与しているのか、また、生徒達が実際に入試長文問題を前にした時、文法訳読法による授業がどれだけ実戦的に役立つのか不安である。3) 授業時間のほとんどが英文の解説と和訳に費やされ、英語そのものを定着させるための練習と訓練がほとんど出来ていない。

金谷(2001)を中心とするプロジェクトチームはこのような疑問・不安を解決するための一手段として「和訳先渡し授業」を提唱している。和訳先渡しと聞くと我々はすぐに「生徒達は楽をしてしまい英文読解力がつかないのではないか」とか、「和訳ができなくなってしまうのではないか」と思いがちであるが、プロジェクトチームによると、和訳先渡し授業を通して「授業中扱える英文の量が増え」、「生徒達の模擬試験の成績が上がり」、「和訳力が下がることはなく」、「語彙力も伸びた」と結論づけている。

このプロジェクトチームが提唱していることの中核は、「和訳を先渡しすることによって理解に掛けなければならない時間を浮かせ、理解した英語を頭の中に取り込む作業、使

う作業を多くする」ということである。決して生徒達に楽をさせるということではなく、むしろ逆に、授業中にインプットとタスクの時間をしっかりと確保して生徒達に徹底的にインテイクを迫り、最終的には生徒達の英語よるアウトプットで締めくくるといふかなりハードな一連の作業なのである。授業中課されるタスクによって生徒達が気を抜ける時間はほとんど無い。教師が一方的に日本語で英文を解説して終わるのでなく、入り口としては「和訳」に頼る部分もあるが、出口としては生徒達が英語でアウトプットをして完結するという、文科省が指導方針として掲げる「使える英語」の育成にも呼応した指導法なのである。

【和訳先渡し授業が目指す授業手順】



5. 和訳先渡しによって生まれた余剰時間の活用法 <金谷(2001)による>

【1】インプット

英文読解の授業におけるインプットとは、理解不十分な英文をひたすら黙読させることではない。クラッシュン(1983)によれば、インプットは学習者に理解可能である場合に最大限の効果を発揮する。そこで、先ず、単語リストと英文の全訳を先渡し、単語レベルにおいても文章レベルにおいても何が書いてあるかを生徒達に一通り理解させておく。その後、次のようなタスクを課す。

- (1) 情報検索系タスク
  - ・日本語で発音された単語を英文から探させる。
  - ・日本語で発音された文章を英文から探させる。
- (2) 全体概要把握タスク
  - ・要約やタイトルを英文のまとまりとマッチさせる。
  - ・日本語訳を読んで英文のパラグラフを正しい順序に並べ変える。
- (3) 内容理解タスク
  - ・英問に対する答が含まれている部分を探させる。
  - ・リスニングによる T-F Questions。
- (4) 主体的判断タスク
  - ・各パラグラフの最も印象に残った文を選ばせる。
  - ・英文のメインアイデアとなる文を指摘させる。

【2】インテイク

英文に何が書いてあるかだいたい理解できた段階において、インテイク（定着）を計るため

の徹底的な音声訓練と Oral Activity を行う。

- (1) 音読・シャドウイングによるタスク
  - ・Q&A で用いた英文を徹底的に音読する。
  - ・ペアを組ませてシャドウイングさせる。
- (2) 英文を素材とした Oral Activity 系タスク
  - ・ペアを組ませて T-F Questions をさせる。
  - ・3人一組で質問者、回答者、記録係を決め、英文の内容について英問英答させる。

### 【3】アウトプット

インプット・インテイクの段階を経て、生徒達は英文の理解度を深め、いくらかは英文を再生できるようになってきている。授業の最終段階として次のようなタスクを課すことによって生徒達に英語をアウトプットさせ、「英語を使って授業を受けた」ことを実感させる。

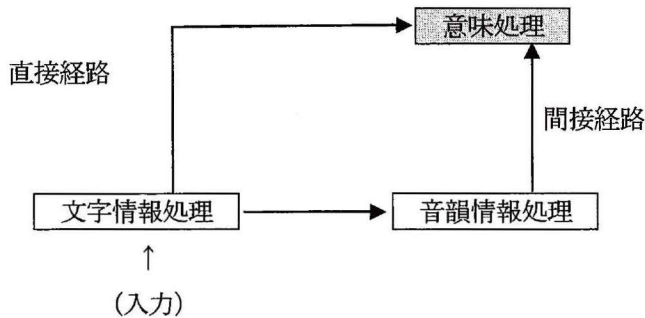
- (1) 読んだ英文を再生させるタスク
  - ・空所補充で要約文を完成させ、それを暗誦させる。
  - ・Q&A で用いた英文を元に要約文を書かせ、それを暗誦させる。
- (2) 読んだ英文をリソースとして、別の英文を作るタスク
  - ・あるパッセージを対話文に置き換える。
  - ・英文中の表現を使って、別の英文を作らせる。

## 6. 音読と読解の関係について

日本語の文章を読む場合もそうであるが(例えばこの文章も)、我々は知らず知らずのうちに頭の中で声を出す「内言読み(subvocalization)」を行っている。これには賛否両論あり、音読する場合よりは速く読めるがより速く読む場合には音声邪魔をして読む速度が落ちると言われている。しかし我々は現段階では受験生が外国語(英語)を読解する問題を議論しているのであり、とりあえず、音読する場合よりも速く、あるいは音読と同等のスピードで英文を読むことが出来れば受験生としては及第とする。

文字を読んで理解するためには2つの経路がある。門田(2001)によれば、日常我々は文字(書記)情報をいったん音韻コード(phonological codes)に転換してから意味処理部門(semantic processor)にアクセスしている。もう1つの経路は、文字情報から直接的に意味処理部門にアクセスする方法である。これを「読解における意味処理の2重アクセスモデル」という。

【 読解における意味処理の2重アクセスモデル 】



文字情報が直接意味処理される直接経路においては、受験生は文字を見て即座に意味を判断するのであるが、それは have, of, and などの頻度の極めて高い基本語に限られ、ほとんどの語彙はいったん音韻符号化され上で意味処理にアクセスする間接経路を通して処理されるものと考えられる。

入力された文字（書記）データに対応する音韻データが十分に脳内辞書に蓄積されていれば意味の処理速度は速いのだが、そうでない場合には文字データに対応する音韻データを補強する必要がある。この補強は音声訓練によってのみ可能であり、その効果は英文読解をする場合だけではなく、リスニングテストを受ける場合にも現れると筆者は考える。

よって、和訳先渡しをすることによって生まれた余剰時間のかなりの割合を音読・音声訓練に当てて音韻データを増やすと共に、英文の内容定着を計るべくインテイクの時間として当てることにした。

## 7. 授業計画

上記「和訳先渡し授業」の利点と「音声訓練」の重要性を踏まえた上で、次のような授業計画を作成し、実践した。

- (1) 実施クラス：私立女子高校3年生の英語選択「英語演習」のクラス。生徒数21名。  
当该校は伝統ある女子校であり、勉学にも部活動にも力を注いでいる。このクラスには2つのクラスの生徒が混合して在籍しており、このクラスを選択していない生徒は他の授業を選択している。当該クラスは成績も概ね良好で、学習意欲も概ね高い方である。
- (2) 使用教材：大学入試英語長文読解問題集「Build Up 2」（山口書店）＜資料参考＞
- (3) 授業時間：5・6 限目(13：15～15：05)の連続110分間授業。ただし途中10分間の休憩あり。授業を連続して行えることが、相当量の一連の activity を一気に実施できるひとつの要因になっている。
- (4) 授業手順とねらい：

### 【1】インプット

- ① 導入<5分>：テキストの主題に関して、英問英答を行う。

- 生徒達が主題に関して持つスキーマを喚起し、読解を容易にする。
- ② 単語確認<4分>：予め配布されたハンドアウトを見ながら、重要語句の意味と発音を確認。
- あとの activity を考慮した場合、この段階における重要語句の確認は必要。
- ③ CD の聞き取り<5分>：テキストを開いて音声を聞かせる。
- 最終的には音読のスピードで英語が理解できることを実感させる上でも重要。
- ④ 和訳配布<3分>：約 500 語程度のテキストに対する和訳を 2 分程度で読み切るように指示。
- あくまでも大まかな全体像を把握させるのが目的で、深読みはさせない。
- ⑤ ワード・ハント<8分>：内容理解の上で Key ワードとなる語句を 5・6 個予め選んでおき、その語句を日本語で読み上げてそれに相当する英単語を探させる。見つかったら挙手させる。ほぼ全員の手が上がったところで一人の生徒を指名し、音読させる。
- 語句をスキャンさせることによって内容理解を深める。
- ⑥ センテンス・ハント<10分>：各段落の内容を理解する上で Key センテンスとなる文章を予め 7・8 文選んでおき、その和訳を読み上げる。生徒達はそれに相当する英文を探し、見つかったら手を挙げる。ほぼ全員の手が上がったところで一人の生徒を指名し、音読させる。
- 文章をスキャンさせることによって内容理解を深める。
- ⑦ 内容理解のための Q&A<10分>：英文の各段落に関して英語で質問し、その答を含む英文に下線を引かせる。引いたら挙手させる。ほぼ全員の手が上がったところで一人の生徒を指名し、音読させる。ほぼ⑥で用いた英文と一致してくる。
- 英問英答を通して、英語で内容を理解させる。

## 【2】インテイク

- ⑧重要文章の音読<20分>：⑦で下線を引いた文章を徹底的に音読させる。
- 内容理解が出来ている英文を反復音読することによって、定着を計る。
- i) 教師のあとについて斉読
- ii) 個人で音読：全員を起立させ、1 回読む毎に東西南北を向かせる四方読みをさせる。どの生徒がどこまで音読できているかよく分かる。
- ⑨ペアによる練習<15分>：⑧で用いた文章を 1 人は read & look up で暗誦し、もう 1 人はそれを聞いて repeat する。終わったら交替。
- 定着を徹底させる。

## 【3】アウトプット

- ⑩要約文の作成<10分>：⑨で用いた 8 つほどの文章のうち 2・3 文を削って 5・6 文に縮

めさせ、要約文を作らせる。接続詞や代名詞も適宜使わせる。

→ 文章を要約させて表現力・創作力を高める。

⑩要約文の暗誦<10分>：予め用意しておいた暗誦用の要約文をハンドアウトし、徹底的に暗誦させる。

→ この時間で用いた英文の要約を暗誦することによって、内容理解と英文の定着を完成させる。

## 8. 和訳先渡し形式の授業を受けた生徒集団とそうでない生徒集団との成績の比較

二学期開始時期（9月上旬）と終了時期（12月上旬）に2015センター試験実践問題（駿台文庫）の読解問題第6問を解かせ、2つの異なる生徒集団の間に成績の差異があったかどうかを検証した。また、同様に、二学期終了時期（12月中旬）に2つの異なる生徒集団に2015センター試験リスニング問題（駿台文庫）の第4問を解かせ、差異があったかどうかを検証した。読解問題もリスニング問題も100点満点に換算した。

### (1) 読解問題における成績の差異について

筆者は「和訳先渡し授業」と並行して、いわゆる「普通」の英文解釈の授業も担当してきた。すなわち、入試長文読解問題を教材とし、語彙・熟語・文法・構文に注意を払いながら英文解釈を行い、重要か所に関しては生徒に和訳させ、そののち解説を加えて和訳を完成させるという、伝統的な文法訳読法を中心とした授業展開である。このクラスも2つのクラスの混合クラスであり、比較的英語の能力は高い。このクラスと「和訳先渡し授業」を実施したクラスとの成績の差は以下のとおりである。

	文法訳読法クラス	和訳先渡しクラス
9月上旬	66.7点	67.8点
12月上旬	58.3点	67.4点

この表を見て特徴的なことは、文法訳読法を中心に授業展開をしたクラスのほうが第2回目の12月上旬に実施したテストにおいて大きく平均点を下げたということである。解かせた実践問題を精査してみると、9月上旬のテスト内容よりも12月上旬のほうが若干難易度が上がっており、このことが影響したものと考えられる。しかし、難易度の上昇は和訳先渡し授業のクラスにも言えることであり、和訳先渡しのクラスのほうは難易度が上がったにもかかわらず微少な平均点の減少で食いどまった。言い方を変えれば、和訳先渡しの授業展開をしたクラスは、テスト問題の難易度が上がったにもかかわらず平均点をほぼ維持するだけの学力がついたとも言える。

### (2) リスニング問題における成績の差異について

(1)と同様に2つのクラスのリスニング問題における成績の差異についても検証した。リスニングのテストは12月中旬に1回のみ実施した。

	文法訳読法クラス	和訳先渡しクラス
12月中旬	46.9点	42.2点

リスニング問題は読解問題とは逆に、和訳先渡し授業のクラスの方が平均点が良くなかった。理由は2つ考えられる。1つは実施時期である。文法訳読法クラスに対するリスニング問題の実施時期はまだ終業式1週間前で、生徒達は落ち着いて受験できていた。しかし、和訳先渡しクラスの方は2学期最終日の最終時間であり、且つ40分間の短縮授業という生徒達にとっては浮き足立つような落ち着かない雰囲気の中でテストを実施せざるを得なかった。センター試験リスニング問題第4問というかなり難解なリスニング問題に集中するには相応しくない教室の雰囲気であった。2つめは平均点を上げる生徒達が不在であった点である。普段からテストなどでは高得点をとる生徒達が3名、この日は推薦入試のために欠席していたという事実である。彼女達の参加があれば平均点は確実に上がっていたはずである。

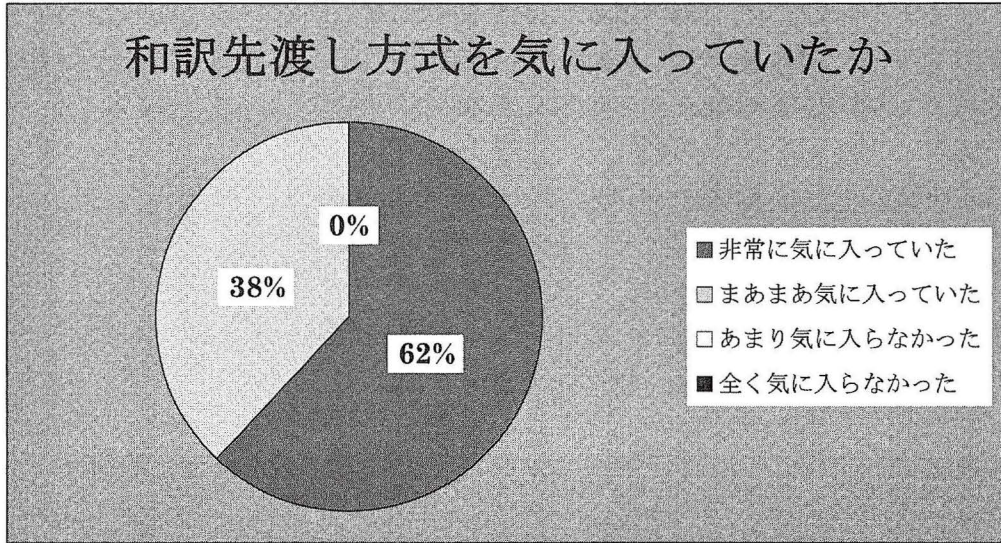
## 9. アンケート結果の分析による研究

「和訳先渡し授業」に対するアンケート結果と感想をもとに、この授業に対する生徒たちの意欲と、受験を控えてこの授業がどれほど効果的であると思うかなどについて考察した。アンケート対象者はこのクラスを受講する21名の生徒である。

(1) あなたは「和訳先渡し方式」を気に入っていましたか。(1つ選択)

- 1) 非常に気に入っていた [13名・61.9%]
- 2) まあまあ気に入っていた [8名・38.0%]
- 3) あまり気に入らなかった [0名・0%]
- 4) 全く気に入らなかった [0名・0%]





(2) 上記の理由は何ですか、具体的に書いて下さい。

- ・ 先ず正しく英文を理解したのちに、英語で（英語の頭で）理解できるから。
- ・ 授業中、和訳がわからないとき確認できるから。
- ・ テスト勉強が楽になるから。
- ・ 私のような成績の良くない子でも授業についていけるから。
- ・ 単語をいちいち調べる必要がないから。
- ・ 和訳に時間を費やすのではなく、たくさん英文に触れられるから。
- ・ 日本語を理解してから英文を読んだので、単語の意味が覚えやすかった。
- ・ 和訳を書く必要がなく、楽だったから。
- ・ ほかの授業では和訳を配るといことはなく、新鮮だったから。また、和訳をしていくという授業形態はつまらなく眠くなるが、この授業のように音読をたくさんしたりキーセンテンスを探す作業は楽しかったから。
- ・ 訳があいまいな部分をすぐに確認できるから。
- ・ そもそも和訳することに意義を感じないから。

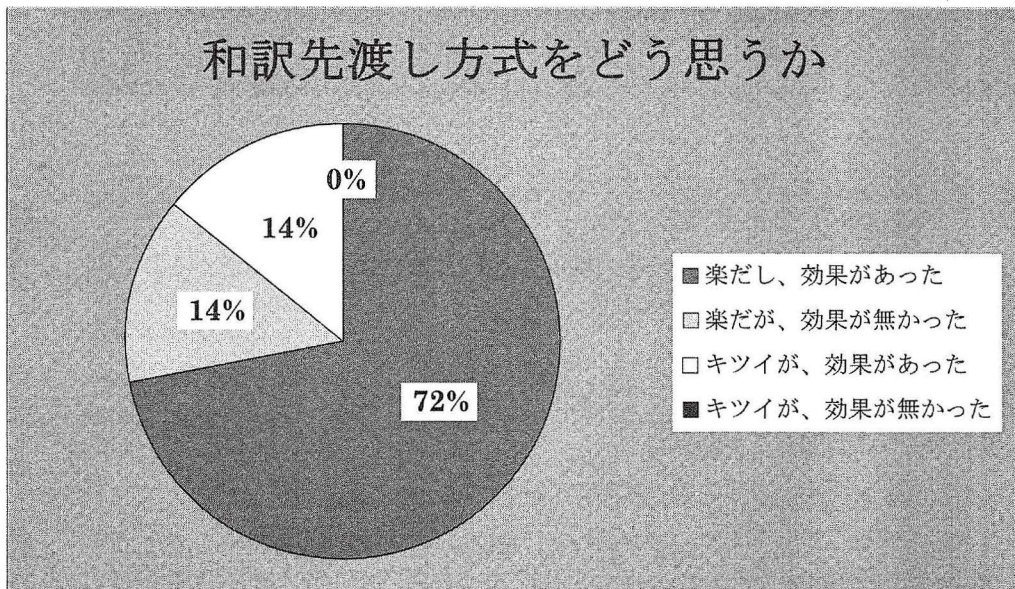
#### < (1) と (2) に関する考察 >

「英語演習」という名称がつく英文解釈の授業でありながら和訳を先渡しするという、生徒達にとっては「新鮮」で「楽な」授業形態は「非常に」と「まあまあ」を合わせると 100%の生徒に気に入ってもらえたようである。特に、「非常に気に入っていた」生徒がクラスの半数以上であったことは、新しい試みを導入した教師としては、この試みがひとまず生徒達に受け入れられたことを裏付ける好結果となった。また、「成績の良くない子でもついて行ける」という

コメントからも分かるように、和訳を参考にしながら指導に従ってタスクをこなせばだれでも授業参加できるという点においても、従来型の英文解釈の授業では破綻を来してしまいがちな生徒達にとっても学習意欲を損なうことのない、画期的な授業形態であったと言える。

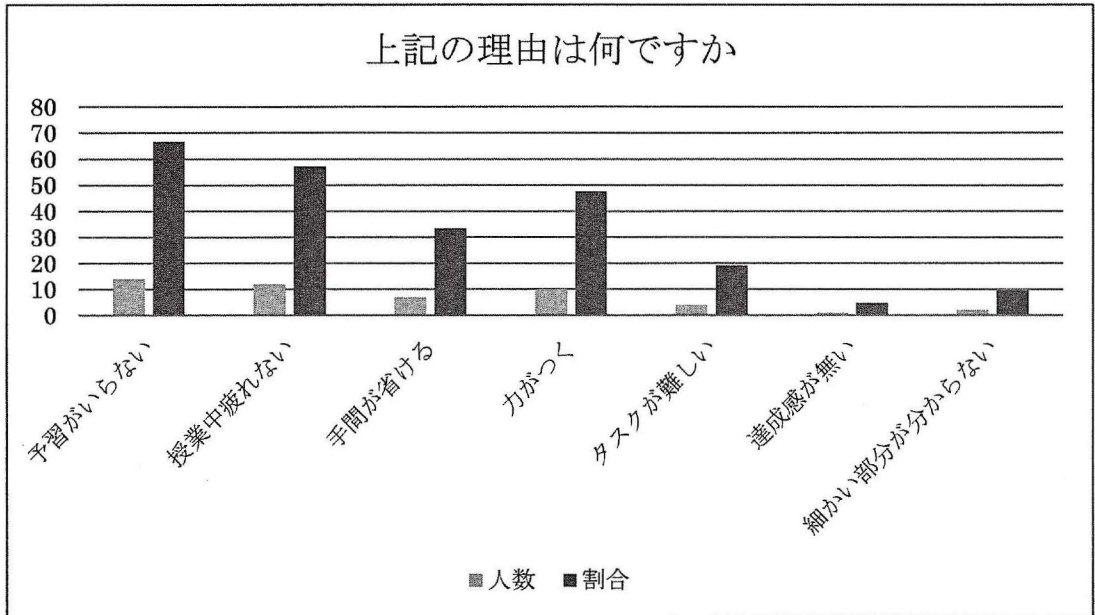
(3) 「和訳先渡し方式」を具体的にどう思いましたか。(1つ選択)

- 1) 楽だし、効果があった [ 15名・71.4% ]
- 2) 楽だが、効果が無かった [ 3名・14.3% ]
- 3) キツイが、効果があった [ 3名・14.3% ]
- 4) キツイし、効果が無かった [ 0名・ 0% ]



(4) 上記の理由は何ですか。(複数回答可)

- 1) 予習がいない [ 14名・66.7% ]
- 2) 授業中、和訳を書かなくていいので疲れない [ 12名・57.1% ]
- 3) 自分でノートを作らなくていいので手間が省ける [ 7名・33.3% ]
- 4) 多様なタスクに取り組めるので力がつく [ 10名・47.6% ]
- 5) タスクが難しい [ 4名・19.0% ]
- 6) 進むペースが速い：達成感が無い [ 1名・4.8% ]
- 7) 英文の細かい部分がわからなくなる [ 2名・9.5% ]
- 8) 英文の内容を深く味わえない [ 0名・0% ]
- 9) その他 (具体的に) → \_\_\_\_\_



### < (3) と (4) に関する考察 >

「楽し、効果があった」と評価した生徒が70%を超えた反面、「楽し、効果がなかった」と評価した生徒が15%近くいた。「予習が足りない」「和訳を書かなくていい」「ノートを作らなくていい」などの項目は、生徒達により多くの努力を期待する教師としては生徒達を甘やかしているのではとつい自責の念に駆られる。そういった意味で、「効果がなかった」と答えた3名の生徒に対しては、自戒の念も込めて、どうして効果が無いと思うのか、今後の「和訳先渡し授業」改善のためにも是非聞いてみたい。

しかし、「効果があった」理由として、「多様なタスクに取り組めるので力がつく」と評価した生徒が半数近くいたことは、私がねらいとした「和訳に割く時間を省いて、浮いた時間を音読や要約作成などのタスクに活用する」目的が半分達成できたと理解して良い。半分しか達成できていないと見るのか半分も達成できたと見るのか、解釈は分かれるところであるが、英文解釈の授業では普通あり得ない画期的な方法を導入したという意味で、半分達成できたことは大いに意義があると理解したい。

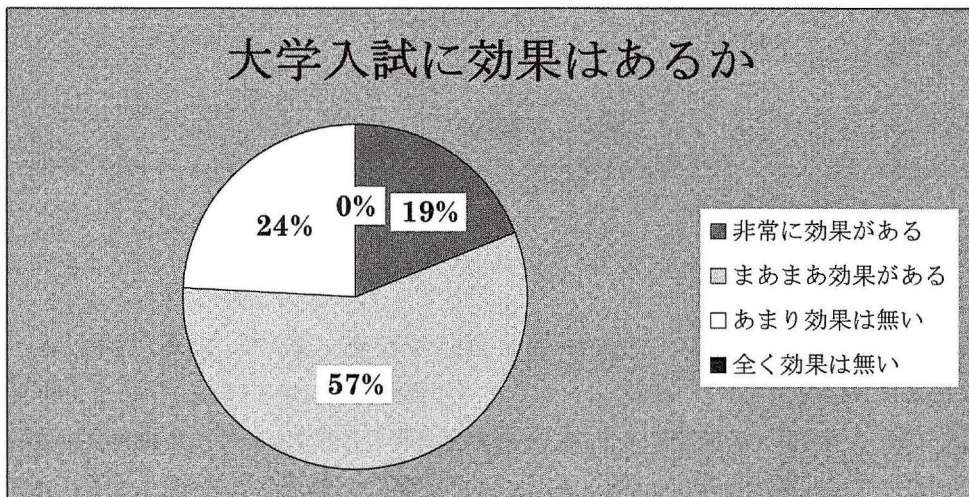
しかし先ほども述べたように、「和訳先渡し授業」が「楽しだから」を主な理由として生徒達に受け入れられるようであってはならない。あくまでも、和訳をしないことによって生まれた余剰時間を、様々なタスクをこなすことによってより生徒達の英語力を伸ばすことのために用いられなければならないことは論を待たない。「タスクが難しい」と答えた生徒が4名いたことは、この授業において様々なタスクが与えられ、生徒達は和訳が無いことを理由に楽しが出来たわけ

では無いことを物語っている。その意味において、和訳先渡し授業を試みる教師は様々のタスクの考案と作成のために、文法訳読法による授業形式よりも3倍も4倍も労力が強いられることを覚悟しなければならない。巻末の資料にその一端を紹介した。

(5) これから実施される大学入試に鑑みて、「和訳先渡し方式」は効果がありそうですか。

(1つ選択)

- 1) 非常に効果がある [ 4名・19.1% ]
- 2) まあまあ効果がある [ 12名・57.1% ]
- 3) あまり効果は無い [ 5名・23.8% ]
- 4) 全く効果は無い [ 0名・0% ]



(6) 上記の理由は何ですか、具体的に書いて下さい。

1) と 2) の理由

- ・英語から日本語への作業なしで理解する練習が出来たので、速読につながると思うから。
- ・単語やフレーズが頭に残っている。
- ・普段発音したり英語を聞いたりすることはあまりないが、この授業では出来たから。
- ・英語はいろいろな方向から勉強すると力が伸びると思うから。
- ・長文を読む練習になったから。
- ・速読するのに効果があると思う。
- ・入試ではいちいち和訳している時間がないので、授業で英語のまま英文を理解する癖がついたことで速読力がアップしたと思う。
- ・和訳を参考にして正しく解釈できるので、間違った解釈をしなくてすむ。

- ・単語や熟語を調べる手間が省けて、覚える時間を授業中に確保することが出来た。
- ・個人的に長文に対する敵意が薄れました。
- ・文の構造が分かるから。
- ・和訳は分からないときだけに見れば効果があると思う。和訳に頼ってばかりだと自分で英文が読めなくなる。
- ・英文を早く読み取る力がついていそうだから。
- ・文章の全体像がつかめるから。

### 3) の理由

- ・速読力を養うことにはならないと思う。
- ・入試に直結していなかったから。
- ・大学入試問題を考えた場合、やっぱり最初から自分で取り組んで問題をこなしていかないと力はつかないと思う。しかし、リスニングは先に訳を渡された方が理解しやすいので、その点ではいいと思う。

## < (5) と (6) に関する考察 >

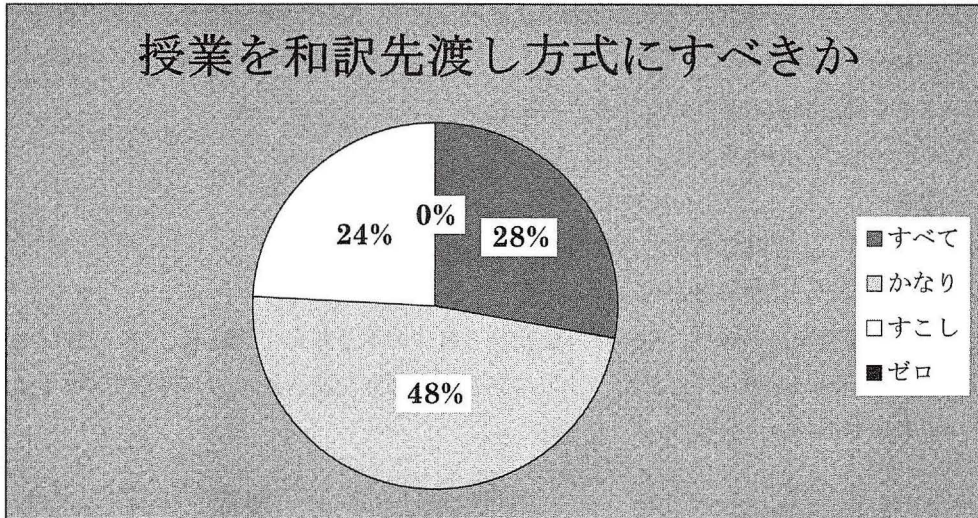
「大学入試に鑑みて、『和訳先渡し授業』は効果があるか」を検証・考察することは本研究の大きな目的の1つである。もちろん、12月下旬の現段階において生徒達の入試結果は判明しておらず、あくまでも生徒達の期待値に過ぎない。しかし、4ヶ月間に渡る和訳先渡し授業を生徒達が入試に照らし合わせてみて有効であると評価しながら受講してきたかどうかを見極める重要な項目である。幸い76.2%の生徒達がこの授業の入試に対する有効性を認めてくれた。この意味において和訳先渡し授業は、差し迫った「危機」である受験を目前にしながらかも、生徒達にその意義を認めさせ、受験に向けて学習意欲を維持させる上で効果があったと言える。

入試長文問題を和訳を介さずに速読する上でこの授業は効果があったと述べる生徒の意見が目立った。他の授業ではあまり重要視されない音読訓練を中心とした、英語を頭ごなしに解釈していく直読直解の英文解釈の仕方が生徒達に受け入れられた証拠である。センター試験やほとんどの私大で採用されているマークセンス方式による長文読解問題において和訳作業はそもそも無用であるばかりか非効率的であり、一度和訳プリントに目を通して文意がとれた英文を、様々なタスクを通してさらに理解を深め定着させることが、入試を目前にした自分の英語力形成にとって有効であることを、8割近い生徒達が実感してくれた。

(7) 一般的な和訳作業を中心とした講義形式の英語授業と比較した場合、「和訳先渡し方式」を実施して良かったですか。(1つ選択)

- 1) すべて「和訳先渡し方式」にすべきである [ 6名・28.6% ]
- 2) 「和訳先渡し方式」をかなり取り入れるべきである [ 10名・47.6% ]

- 3) 「和訳先渡し方式」をすこし取り入れるべきである [ 5名・23.8% ]  
4) 「和訳先渡し方式」は全く取り入れるべきではない [ 0名・ 0% ]



(8) 上記の理由は何ですか、具体的に書いて下さい。

1) と 2) の理由

- ・ほかの英語の授業の多くは先生が和訳を言いますが、実際、生徒のほとんどがそれを理解していないので、紙にまとめてある和訳を先に配り、内容を理解するための時間に回した方が効率がいいと思うから。
- ・授業中に先生の和訳を聞いて書くことに必死になっていると、単語や文脈など大切なことを聞き逃して学ぶことが出来ない。和訳があれば余裕を持って聞ける。
- ・テスト対策がしやすい。
- ・楽だから。
- ・和訳作業を自分でやると、どうしても単語の意味を調べたりするのが多くなって文全体の理解まで手が届かないが、和訳先渡し方式では長文読解の力がつくと思うから。
- ・和訳先渡し方式だと自分の分からない部分だけしっかり読めばいいので、ストレスにならないし、ほかのことに時間が回せて一番効率的だと思う。
- ・自分で和訳をすると考えなければいけないので精読力はつくが、複雑な文構造のものはSVOCMだけを解説し、あとは和訳を先に配ってしまうべき。
- ・スムーズに進めるから。
- ・全部の授業で先に渡すと問題を解く力がつかなくなりそう。自分で考えるものがある一方、こういう形のものもあるのいいと思う。

- ・いろいろな授業の形式があるのいいと思うから。
- ・和訳に頼りすぎる部分もあるので、半分和訳先渡し方式、半分は和訳なしという風にした方がいいかもしれない。

### 3) の理由

- ・入試本番では和訳がないので、和訳先渡し方式と、和訳を渡さない授業の両方を取り入れるのが良いと思う。
- ・和訳先渡し方式は実施して良かったと思います。しかし、「すべて」ということになると、何か欠点が出てくる恐れがあるので、半々にするのが良いと思います。
- ・たまには自分で和訳する力をつけることも大事だと思うから。
- ・全体像も大事だが、難しいところの解説をもっと詳細に説明して欲しい。
- ・全部の授業で和訳先渡し方式にしたら、自分で和訳する力がなくなるから。

### < (7) と (8) に関する考察 >

「和訳先渡し方式」を普段の英語授業においても取り入れるべきであると解答した生徒達の割合は、奇しくも (6) の「和訳先渡し授業が入試に効果がある」と考える生徒達の割合と同じ 76.2% になった。このことは、生徒達にとって普段の授業は、差し迫った「危機」である入試と密接に結びついていることを如実に示すものである。しかも、(6) において「(大学入試に) 非常に効果がある」と答えた 4 人よりも、「すべて (の授業を) 『和訳先渡し方式』にすべきである」と答えた生徒は 2 人多い 6 人であった。

ここで注意しなければならないのは、和訳を予習として求められる「普通の」英語の授業よりも和訳先渡し方式の方が生徒達にとっては楽であり、だから生徒達はこちらを選んだのではないかと懸念される点である。しかし、この点において生徒達はかなり深く洞察していて、「全部の授業で (和訳を) 先に渡すと問題を解く力がつかなくなりそう」「和訳に頼りすぎる部分もあるので、半分和訳先渡し方式、半分は和訳なしという風にした方がいい」「自分で和訳をすると考えなければいけないので精読力はつく」などの和訳作業必要論も認識しながら、「ほかの英語の授業の多くは先生が和訳を言いますが、実際、生徒のほとんどがそれを理解していない」「授業中に先生の和訳を聞いて書くことに必死になっていると、単語や文脈など大切なことを聞き逃して学ぶことが出来ない」「和訳先渡し方式だと自分の分からない部分だけしっかり読めばいいので、ストレスにならない」などの意見に見られるように、なぜ和訳先渡し方式の方が好ましいかを極めて合理的また冷静に分析している。

しかし、かといって、「全部の授業で和訳先渡し方式にしたら、自分で和訳する力がなくなる」の意見に代表されるように、また、5 人 (23.8%) の生徒達が「『和訳先渡し方式』(の導入) はすこしに留めるべきである」と考えているように、生徒達の間に和訳作業に対する愛着と必要性の認識が全くないというわけではない。このことを考慮し、「和訳先渡し授業」と「和訳作業を中心とした授業」との実施頻度の割合と授業形態に関する結論は、今後の研究を待つことに

したい。

(9) その他、「和訳先渡し方式」について感想があれば書いて下さい。

- ・テストに活かされたので良かったです。
- ・内容が分からないときにいつでも和訳が確認できたので良かったです。
- ・和訳を見てから音読することで、理解しながら英文を読むことが出来た。
- ・和訳プリントに関してではないが、太字で熟語が強調してあった英文のプリントはかなり役に立った。熟語を覚えるのに使えた。
- ・この方法を通してますます力がついたと思います。入試も授業で習ったことを活かして頑張ります。
- ・予習をし忘れても授業について行ける。復習がしやすい。
- ・とても良いと思いました。学校の英語の授業、ましてやリーディングで和訳を下さる先生は初めてでした。内容をとにかく英語そのもので理解する力につなげられる方法だと感じました。
- ・とてもわかりやすく、英文を短時間で理解するのに役立ちました。

#### < (9) に関する考察 >

予習段階で和訳してくることを重要視する授業で和訳プリントを配布してしまえば、生徒達はとたんに「和訳プリントがあるからもう大丈夫」と安心して勉強しなくなる可能性がある。ところが「和訳先渡し方式」の授業において生徒達は和訳プリントを主体的に利用し、分からないところだけを適宜見たり、和訳を確認したあとで英文の音読に役立てたりしていることが分かる。また補助プリントとして熟語や構文を太字で印刷し、大まかな意味の区切れ(センス・グループ)毎にスラッシュを入れて音読に役立つよう工夫したプリントも配布したが、これも有効に活用していたようである。

和訳プリントで先ず書かれている内容を理解し、その後英語を英語として理解する力をつけることがこの授業の目的であることに自ら気づいた生徒もいた。また、この方法によって実力を高め、入試に役立てていきたいとコメントする生徒もいた。「和訳先渡し方式」についてオープンエンドで感想を書かせた最後の項目であったが、この方式に対するネガティブな評価は一つもなかった。

#### 10. まとめ

センター問題第6問方式の英語長文読解問題を「和訳先渡し方式」のクラスと従来型のクラスとに3ヶ月の間を置いて2回に分けて実施したが、「和訳先渡し方式」のクラスの方が顕著に力を付けたという結果は得られなかった。リスニング問題においても差は見られなかった。週1日連続2時間の「和訳先渡し方式」の授業だけでは、狙いとした音読訓練を中心とした英



文構造の内在化は不十分であり、従来型のクラスに差をつけるほどまでに英語力を伸ばすことはできなかった。十分に効果を出すためには、1日1時間ずつで良いから、最低でも週3日の「和訳先渡し方式」による授業を実施し、また、相当量の課題を課して生徒達に家庭学習を迫りながら、音読訓練を中心とした学習がいかに大切かを生徒達に認識させていく必要がある。

「和訳先渡し方式」の新鮮さは最初の1ヶ月間は生徒達を惹きつけ、ほぼ全員が授業に集中していた。しかし、2ヶ月目に入ると、キーワード探しや音読などのタスクにおいて手を抜く生徒が出てきた。このため、より生徒達の自主性と思考力が必要とされる、自分で質問を作成し自分で答えを導き出すなどの、マンネリ化を防ぐためのタスクも課した。また、今後の課題として、生徒達の意見にもあるように、英文解釈上難解で重要な英文については部分的に生徒達に和訳作業を課すようなタスクがあっても良いと思われる。すべての授業において「和訳先渡し方式」を100%実施するのではなく、様々な方式・タスクを通して生徒達の英語力を伸ばすことが、最終的に我々に求められていることである。

しかし、「和訳先渡し方式」の授業が生徒達には新鮮で、授業に対する意欲をかき立て、受験に立ち向かう勇気を与えてきたことは間違いのない事実である。授業最終日に実施したアンケートで生徒達のほぼ全員がこの授業形式を気に入っていたとの結果を得たときには、様々なタスクを考案し実施してきた身としてはその努力が報われた思いがした。また、一学期中に行っていた「普通の」英文解釈の授業では学習意欲が無くふさがちであった生徒達が、二学期のこの授業形式になったとたん俄然やる気を出して授業に取り組んでくれたことも、この授業方式が英文解釈の一方式として有効であることを証明するものとなった。この生徒達も含めて、まもなく始まる受験において21人の生徒達全員が十二分に実力を発揮してくれることを願って止まない。

## < 資料編 >

### <資料1>：和訳先渡し授業で用いた大学入試問題 [部分]

To many Japanese, the key to their personality lies not in their stars but in their blood type. Type As, they believe, are perfectionists and make good accountants; type Bs are sociable but selfish.

Now one of Japan's favorite pop beliefs is running into accusations of abuse and discrimination, with critics saying it is being used to assign jobs, match couples, even pigeonhole schoolchildren.

Newspaper polls show only 20 percent of Japanese say they're convinced that blood type influences personality. But the theory, imported from its Nazi supporters and adopted by the Japanese government in the 1930s, is widely popular nonetheless. It is also widespread in South Korea. The theory has been around for decades, but its dark past is little known.

The discovery of blood types in 1901 was one of the greatest advances in medical history, but the breakthrough was then perverted by the Nazis to claim the superiority of "true" Germans – mostly types

A and O – over Jews, Asians and others with larger proportions of type B blood.

<資料2> : キーセンテンスに下線を施し、重要語句を太文字にしたハンドアウト[部分]

To many Japanese, the key to their personality lies / **not in** their stars **but in** their blood type. Type As, they believe, are perfectionists and **make** good accountants; type Bs are sociable but selfish.

Now one of Japan's favorite pop beliefs is **running into** accusations / of abuse and discrimination, with critics saying it is **being used to** assign jobs, match couples, even pigeonhole schoolchildren.

Newspaper polls show only 20 percent of Japanese say they're convinced that blood type influences personality. But the theory, **imported** from its Nazi supporters / and **adopted** by the Japanese government in the 1930s, is widely popular **nonetheless**. It is also widespread in South Korea. The theory has **been around** for decades, but its dark past is little known.

The discovery of blood types in 1901 was one of the greatest advances in medical history, but the breakthrough was then perverted by the Nazis / to claim the **superiority** of "true" Germans – **mostly** types A and O – **over** Jews, Asians and others / with larger proportions of type B blood.

<資料3> : 内容理解のためのQ&A[部分]

☆ 次の間に英語で答えなさい

1. Which do many Japanese use to find out about their personality, their stars or their blood type?
2. Do critics like the belief about the blood type?
3. Is the theory of the blood type still popular among the Japanese?

<資料4> : キー・センテンス並べ替え問題 [部分]

☆ 次の文を物語の順に並べ変えなさい

- A) To many Japanese, the key to their personality lies not in their stars but in their blood type.
- B) The breakthrough was then perverted by the Nazis to claim the superiority of "true" Germans
- C) He says it's not intended to rank people and should only be used to make the best of one's talent and smooth out relationships.

H) The author blames the craze on a national passion for efficiency and order.

A) → \_\_\_\_\_ → \_\_\_\_\_ → \_\_\_\_\_ → \_\_\_\_\_ → \_\_\_\_\_ → \_\_\_\_\_ → H)

<資料5> : 要約文穴埋め問題 [部分]

☆ 本文に関する次の要約文を完成しなさい

Although many Japanese try to find about their ( ) by their

( ) ( ), the belief is ( ) into  
( ) of abuse and ( ). The theory was  
( ) by the Nazis and ( ) by the Japanese  
( ) government. It was ( ) by a ( )  
with no medical background.

<資料6> : 疑問文作成問題 [部分]

☆ 各段落について、次の要領で英語の問いの文を作りなさい。

<第1段落>

1. この段落で一番大切な文が答えとなる疑問文。

<第2段落>

2. この段落で一番大切な文が答えとなる疑問文。  
3. 2. の文章を具体的に述べている最後の文が答えとなる疑問文。

<資料7> : キー・センテンス英訳問題 [部分]

☆ テキストを参考にして、次の文を英訳しなさい

\*Introduction (導入)

コンパニオンアニマルは病気や体の不自由な人に好影響を与える。

\*Research report 1 (研究報告①)

- ①介助犬のためにケアを受ける人がより自由な気持ちになった。  
②(In addition)精神的に好影響があった。  
③(Moreover)介護に要する時間が減少した。

<資料8> : 疑問文とその解答を作成する問題 [部分]

☆ 各段落に関して、次の疑問文とそれに対する解答の文を作りなさい

<第1段落>

1) What is the reason why a \_\_\_\_\_ ?

→ It is much \_\_\_\_\_

<第2段落>

1) When does a language succeed?

→ It succeeds when their users \_\_\_\_\_

<第3段落>

1) What is common to hear people claim?

→ It is common to hear people claim \_\_\_\_\_

＜資料9＞：二学期期末テスト問題 [部分]

6) 下の英文中から次の4語が抜かれている。もともとあった位置の直前と直後の語を書き出  
しなさい。(句読点は語と考えない)

avoid      pause      understood      direct

Japanese and Americans often confuse each other in the way they speak and treat silence. An American asks a Japanese a question and there is a pause before the Japanese responds. If the question is fairly, the pause may be even longer as the Japanese considers how to a direct answer. The American, however, may assume that the pause is because the question was not clearly and so he may rephrase the question.

参 考 文 献

- 卯城祐司 (2011) 『英語で英語を読む授業』 研究社
- 門田修平・野呂忠司 (2001) 『英語リーディングの認知メカニズム』 くろしお出版
- 金屋 憲・高知県高校授業研究プロジェクト・チーム (2004) 『和訳先渡し授業の試み』 三省堂
- 金屋 憲編著 (2014) 『高校英語を変える』 アルク
- 草壁 玲 (2012) 『長文読解 Build Up』 山口書店
- 小池生夫 (2013) 『提言 日本の英語教育』 光村図書
- 佐野正之 (2009) 『初めてのアクション・リサーチ』 大修館書店
- 染谷泰正・南津佳広 (2014) 『Reading Powerhouse』 金星堂
- 高橋麻衣子 (2013) 『人はなぜ音読をするのか』 教育心理学研究
- 寺内 正典 (2012) 『英語教育学の実証的研究法入門』 研究社
- 横川博一ほか (2014) 『外国語運用能力はいかに熟達化するのか』 小柏社
- Stephen Krashen (1982) *Principles and Practice in Second Language Acquisition* Prentice-Hall International